

T-9番 要約

1 被害者

匿名、住所地非公表。現在高校2年（接種時中1～中2）

2 接種前

病歴等特になし、アレルギーなし、学校も欠席なし、運動部所属

3 接種 サーバリックス（2011年3月7日、4月11日、9月13日）

4 経過と症状

2011年

9月14日 3回目接種翌日酷いめまいと耳鳴り、1週間ほど注射部位が痛む

2012年

5月27日 夜、寒気がした後に体中が熱くなり3時間ほど全身を移動する痛み

5月28日 起床すると全身が重く力が入らない

6月4日 総合病院に入院、ギラン・バレー症候群と診断

γグロブリン製剤5日間投与により痛みは治まる

7月3日～9月7日 リハビリ専門病院入院、脱力、体温調整器困難

退院後車いす生活・学校は親が車で送迎

10月 食欲不振、酷い頭痛、めまい、血液検査は異常なし

2013年

5月 酷い頭痛、めまい、吐気、心臓の痛み、息苦しい、睡眠障害

8月8日 脳神経外科受診、筋膜炎疑いの診断

9月6日 全身の痛み、さすっても痛い、紅斑、過敏症とのこと（佐々木医師）

10月2日 脳神経外科、筋膜炎の診断

10月4日 左肘から指先まで激痛、さすっても痛い

10月22日～11月23日 脳神経外科入院

筋生検手術、パルス治療、γグロブリン

11月24日 退院翌朝から左足の強い痛みが一日中続く

2014年

1月27日 手足の平が真っ赤になり、体中の部位に温度差がある、太腿が痛い

4月21日 総合病院入院ステロイド治療

5 診断

ギラン・バレー症候群、筋膜炎、末梢神経障害、自律神経異常

6 現在の状況

脱力感は継続中、親が車で学校送迎、外では車いす、授業は半分ほど、進級進学に悩み

T-9番

1 はじめに

私は、平成23年3月から9月にかけて、3回にわたり子宮頸がんワクチンであるサーバリックスの接種を受けました。

その後、私はワクチンによる副反応被害を受けていますので、その被害についてお話しします。

2 子宮頸がんワクチン接種に至る経緯

(1) ワクチン接種までの状況

① 接種前の健康状態

私は、最初、中学一年生の春休みに子宮頸がんワクチンを接種しました。

それまで、私は、特に大きな病気をしたことはなく、小学校も1日か2日風邪で休んだくらいです。

中学校ではバレーボール部に所属して、毎日、練習がありましたが、私は体力がある方で、部活動も勉強も一日も休んだことはありませんでした。

② ワクチン接種に至る経緯

子宮頸がんワクチンを接種する前、私が通っていた中学校で子宮頸がんワクチン接種を促すプリントが配布され、当時の担任の教師も「ガンを予防できるワクチンだから接種したほうがいいよ」と生徒に子宮頸がんワクチン接種を勧めていました。

また、同じ頃、保健所からも子宮頸がんワクチン接種を呼びかける葉書も送られてきましたし、テレビではCMも流れていました。

私は、これらのプリントや葉書、CMを見て、「ガンを防げるなら接種したい」と思い、子宮頸がんワクチンを接種することにしました。

そして、私は中学1年の春休みの平成23年3月7日、風邪などでいつもお世話になる近所の医院（以下、「H医院」）で本件ワクチンの接種を受けました。

(2) ワクチン接種時

私は、H医院では計3回サーバリックスの接種を受けましたが、そのとき、医師や看護師から有効性や副反応について説明を受けていません。

事前に裏にワクチン接種についての注意書がある問診票への記入を求められましたが、それとは別に子宮頸がんワクチンについての有効性や副反応について説明はなく、他のワクチン接種のときと同じように「何かあったら来てね」と医師が注射を打つときに一言私に告げただけでした。

私は、子宮頸がんワクチンの接種によって、今までに経験した注射よりも強い痛みを感じましたが、筋肉注射が初めてだったこともあり、筋肉注射だからこんなに痛むのかしらと思いました。

同時期に子宮頸がんワクチンを接種したバレーボール部の部員たちも、子宮頸がんワクチン接種はとても痛いと言っていましたので、私も皆と同じように痛いのだろうと考えていました。

注射のあとは、一週間くらいは注射をした場所が痛く、バレーボールをするときは腕

を上下に動かしづらかったり、物が当たると痛むのが2週間くらい続いたり、ふらふらしたりしました。

3 副反応について

(1) 痛みやめまい、耳鳴りの出現

上記のとおり、サーバリックスを接種したあとは、注射をした場所が痛んだり、ふらふらしたりしたのですが、筋肉注射だから痛いのだろうし、同時期に子宮頸がんワクチンを受けた友人も注射をした場所が痛むと言っていたので、あまり気にしていませんでした。

そういったこともあり、私は、その後、平成23年4月11日に2回目、平成23年9月13日に3回目のサーバリックス接種を受けました。

2回目、3回目の接種の後も、注射をした場所が痛み、何か物があたるとひどく痛みました。

特に、3回目の接種のあとは、翌日、バレーボール部の練習の最中に、めまいや耳鳴りがして、吐き気をもよおしました。

めまいや耳鳴り、吐き気は3日ほど続き、そのことを心配した母が私を耳鼻科に連れて行ってくれましたが、医師からは特に異常はないと言われ、めまいを治める薬を処方されました。

(2) 全身の激しい痛みの出現

子宮頸がんワクチン接種から8ヶ月後、私は中学三年に進級し、平成24年5月24日から26日までの三日間、京都などに修学旅行へ行きました。

修学旅行から帰ってきた翌日の同年5月27日の夜、私は、突然、悪寒におそわれ、今までに経験をしたことがないほどの体の痛みが出現しました。

最初は体のどこと言わず、全身がとにかく痛くなり、歩くことができなくなって、その場でしゃがみこんでしまいました。

そんな私の様子を見て、心配した両親は私を布団まで連れて行ってくれましたが、その後も、激しい痛みは背中、足、腕、腰、ふくらはぎ、ふともも、肩、背中といろんな場所を移動するようになり、それから3時間以上続きました。

翌朝、目が覚めてみると、痛みは引いていましたが、体が重くて、手足がだらんと脱力してしまって力がはまらない状態でした。

私の症状を帯状疱疹ではないかと思った母に近所の皮膚科に連れて行ってもらいましたが、そこでもまた特に異常はないと言われました。

しかし、それから1週間は、一日に1時間は体のどこかが激しく痛み治まらないという状態が続きました。

同月29日からは修学旅行後の代休も明けて学校が始まりましたので、私は登校していましたが、足が脱力していて思うように動かず、階段を上るのも困難な状態でしたので、ワクチンを接種したH医院を受診したところ、医師にも原因はわからないとのこと、大学病院を紹介されました。

(3) 通院治療

① ギランバレー症候群との診断と治療

平成24年6月4日、私は、H医院から紹介された大学病院（以下、「S大学病院」）を受診し、同日、検査入院をすることとなりました。この日は、体の痛みと脱力がひどく、院内の待合室でも椅子にまっすぐ座っていることができず、車いすで移動をするほどでした。

そのため、その様子をみた医師が、私の病状がどんどん進行していることが明らかなので入院の必要があると判断し、私は入院することになりました。

入院後、MRIの画像検査、血液検査、髄液の検査などをして、同年6月6日、ギランバレー症候群と診断され、γグロブリン製剤の投与など治療が始まりました。

その後、S大学病院の医師からは、今後はリハビリを集中的に行ったほうが回復が早いと言われ、私は、リハビリを専門的に行う病院（以下、「Kリハビリ病院」）に転院することとなりました。

② その後のリハビリ治療

平成24年6月30日、私はS大学病院を退院し、同年7月3日にKリハビリ病院に入院をしました。

入院中は、手足の脱力がひどく自力で動くことがなかなかできませんでした。また、体温調節もできなくなっていましたので、夏なのにまったく汗が出ず、体の中に熱がこもる感じがとてもつらかったのを覚えています。

Kリハビリ病院では、2ヶ月間に渡ってリハビリ治療を受け退院することになりました。退院をするころには、私は、少しの距離なら自力歩行で散歩ができるまで回復していました。

同年9月7日にKリハビリ病院を退院した後、私は同月10日、中学校に復帰をしました。

退院後も、体の脱力がありましたので、通学は母に送り迎えをしてもらい、校内での移動は車いすを使用し、階段はゆっくり歩いて移動しました。

けれども、私はとても疲れやすくなっていましたし、頭痛やめまいも出てしまうために、体育の授業は休んで、一日のうち1時間から2時間は保健室で休ませてもらっていました。

(4) 高校進学

私には将来国際的な仕事をしたいという夢があり、ずっと高校では英語をきちんと学べる学校に進学したいと考えていました。

退院してからの症状がとても疲れやすく受験勉強が出来る状態でない事を母に指摘され、自分でもそう思い、学校推薦での受験を決めました。

そのため、私は、自宅から比較的近い距離で英語の授業が充実している高校を受験し、平成25年4月からその高校に通っています。

高校への通学は毎日母に送迎をしてもらい、必要なときは車椅子を使って移動することになりました。

(5) 体調の悪化

高校に入学してから1ヶ月は気持ちも張っていたので、授業も休まずに頑張って登校しました。

ところが、平成25年5月の連休最後の夜、ひどい頭痛、めまい、吐き気、心臓の痛

み、息苦しさ、睡眠障害が起こり、食欲もなくなって、翌日からの学校も早退してしまいました。

そのため、私は、S大学病院を受診し、MRI画像検査、心電図検査、神経伝導検査など色々な検査を受けました。

検査の結果、手の神経が100%再生していること、足の神経は70%再生していることがわかり、ギランバレー症候群はほとんど治っているとされました。

けれども、実際、私は長い時間は歩けませんでしたし、疲れやすく、すぐに手足がだらんと力が抜けてしまう脱力の症状がありましたので、心療内科の受診を勧められ、同診療科で睡眠導入剤などを処方されました。

それ以降、現在に至るまで、体の脱力、疲労感はずっと続いています。体温調節もできないので、暑いとすぐのぼせて熱中症のようになってしまい、ずっと保冷剤が手放せません。

4 子宮頸がんワクチンとの関連性についての診断

(1) 子宮頸がんワクチン接種勧奨中止

平成25年6月、厚労省が子宮頸がんワクチン接種の勧奨を止めたという報道がありました。そして、私は、母の友人から、子宮頸がんワクチンの副反応事例にギランバレー症候群が記載されたと聞き、疑いを持ち始めました。

(2) 子宮頸がんワクチンとの関連性について診断

同年8月8日、私は、被害者連絡会から教えてもらった病院（以下、「R病院」）を受診し、同病院の医師から今までの症状が他の子宮頸がんワクチンを打った人たちと同じ症状だと説明をされました。

同病院では、ワクチンの接種部位にしこりが残っていることがわかり、MRI検査の結果、子宮頸がんワクチン接種後のマクロファージ性筋膜炎の疑いがあるとの診断を受けました。

(3) 筋膜炎の診断と治療

その後、同年9月6日、今までにないくらいひどい全身の痛みと、肘から手首、手のひらに紅斑が出て、字も書けないくらいに脱力をしてしまい身体状態が悪化してしまいました。

同年10月2日には、県外の大学病院脳神経内科（以下、「N病院」）も受診し、激しい痛みの原因は筋膜炎でステロイドと免疫抑制剤で約1ヶ月の入院治療が必要だとアドバイスをされました。

私は、長期の入院をするとせっかく入学した高校の勉強にもついていけないのではないか、進級はすることができるのかなどととても不安に感じて、入院をためらいました。

けれども、医師や家族から高校はやり直しがきくから治療して元気になることを考えようと説得されて治療を決意しました。

同年10月22日、私は、R病院に入院し治療を受けることになりました。

R病院では、原因解明のため筋膜炎の治療をする前に筋生検をし、その後、同年11月5日から3日間ステロイドの大量投与を受けました。

しかし、同月14日には、ステロイドの効き目がなく、副作用で疲労感も増したこと

から、 γ グロブリンの投与が始まりました。

同月20日ころからは、少しずつ体が楽になってきて、MRI検査の結果、 γ グロブリンが効いたようだと言われ、同月23日には退院をすることになりました。

このとき受けた筋生検ではマクロファージ性筋膜炎の原因物質と考えられるアルミニウムは検出されず、症状についても根本的な治療ができていないので痛みが少し軽減されただけです。

5 現在の状況

(1) 高校生活

R病院退院後、同年12月2日から私は高校に復帰しました。

最初は、一日1時間だけ授業にでることから始め、徐々に2～3時間授業に出られるように頑張っています。

けれども、相変わらず極度の疲労で、なかなか自分の思ったようには生活ができていないのが現状です。

(2) その後の通院

本年4月21日～24日に県外の病院（以下、「T病院」）にて脳のスペクトル検査・MRI・髄液検査などを行い、左の海馬の血流が悪いこと、髄液のタンパクの値が高いなどの異常が出ていることが判明しました。

まだ、すべての検査結果は出ていないのですが、脳に何らかの炎症があって、歩行困難・極度の疲労感・脱力などの症状を引き起こしている可能性はあると医師から説明を受けています。

今後は、その治療のために、平成26年4月と6月、7月にステロイドパルス治療（1週間の入院治療）をすることにしています。

6 さいごに

これまで、私は、なんどもステロイド大量投与や γ グロブリン大量投与などの治療を受けています。

治療を受けたあとは、脱力の症状が軽くなるのですが、しばらくすると再び脱力症状や全身の痛みなど症状が再び出てきてしまいます。

私は、色々な病院を受診し、検査や治療を受けてきましたが、明らかに効果があるといえる治療法は見つかっておらず、この先、高校生活が無事に遅れるのか不安な日々を過ごしています。

「がんを防ぐことができる」と思って子宮頸がんワクチンを接種しましたが、こんな副反応症状が出るとは想像もしていませんでした。

子宮頸がんワクチンを接種するまで普通にできていたことが、今は困難でそんな自分でもどかしく、とても悔しい思いをしています。

国や自治体には、一刻も早く、子宮頸がんワクチンの危険性と有効性を明らかにして、治療方法を確立してもらいたいと思っています。